

国家戦略特区・ 養父市の挑戦と連携

地方創生に向け、改革の先頭を行く

広瀬 栄
・養父市長
楠見 晴重
・学長



次世代の農業の担い手をいかに育てるか

2014年8月、関西大学は兵庫県養父市と包括的連携協定を結んだ。養父市は5月に指定された日本に6カ所ある国家戦略特区の1つ。他の特区が広域あるいは大都市であるのに対して、養父市は人口2万6000人で3分の1が65歳以上。人口減少と高齢化に悩む中山間地域の振興のモデルケースとなるか、注目を集めている。強力なリーダーシップで規制改革を進める広瀬栄養父市長と楠見晴重学長が、国家戦略特区における官学連携の在り方と可能性を語り合った。



◆特区申請の背景に、自治体消失の危機感

楠見 農業分野の国家戦略特区に認定されてから、養父市に大変注目が集まっています。養父市はなぜ国家戦略特区に申請したのでしょうか？

広瀬 養父市は中山間地域に位置するため、農業の大規模産業化は困難です。生産者はほとんどが小規模な兼業農家で高齢化も進んでおり、担い手の平均年齢は70代半ばを過ぎています。その方々が、先祖から引き継いだ土地を自分の代で終わらせる事ができないからと頑張っていたら、今は何とか農地を維持しています。しかし、後継者がいないというのが、今の養父市における農業の課題です。

体力的な限界もあり、あと数年すれば、今の担い手の方も農業を続けるのが難しくなります。その時に後継者がいなければ、耕作放棄地が増え、農地が荒廃します。

先祖が狭い土地を少しずつ耕しながら農地として開き、農産物を作り、家を建て、村ができ、町ができ、そして発展してきた養父市です。そのベースが今、崩れようとしていると言えます。今の農業の担い手がお元気なうちに、農地が荒れないような状況作りをしておきたい。後継者を育てておきたい。それが今回、国家戦略特区を申請した根底にあります。

楠見 どのような改革を実行されようとしているのですか？

広瀬 基本方針は、耕作放棄地を解消して、農業振興を図っていきたくと考えています。そのためには、担い手をどのように確保するか。現在も農業をされている方が規模を拡大して農地を耕す、あるいは、集落全体で農地を守っていく集落営農を基本に、企業や新たに兼業で農業を始める方、自分の食べるものは安全安心なものを自分の手で作ってみたいという方など、多様な担い手にどんどん来ていただける仕組み作りを行っています。

楠見 具体的にどのような事業を計画されているのですか？

広瀬 5つの重点事業を中心に進めています。

1つ目は農地の流動化の問題です。従来、農地法により農地の転売や貸借は、農家や農協からなる農業委員会の許可が必要

とされ、手続きに時間がかかっていました。この許認可の権限を市に移すことが決定され、10月から市役所で農地の転売・貸借についての実務を行い、事務の円滑化が既に実現しました。

2つ目は、農業資金融通の問題です。今まで、商工業者が農業参入する場合、農業部門については融資の対象外でした。これを中小企業庁と話し合い、農業も信用保証協会の対象となる仕組みを国が作りました。養父市では12月の議会で、関係する資金を予算化する予定です。

3つ目は、農業生産法人の役員要件の緩和です。企業等が養父市で農業を行う場合、地域の農業者と連携して農業生産法人を作らなければなりません。しかし、設立には役員の過半が農業常時従事者、更にその過半が農作業従事者という要件があり、このために他の地域の企業が作りにくい状況がありました。この役員要件を緩和し、既に市内外の複数の企業等が養父市の中で農業生産法人の設立に向けて動き出しています。

4つ目は、農地に農家レストランのような施設を造ることを、特区内に限ってできるようにしました。現在は、養父市が100%出資した「やぶパートナーズ」という地域公共会社と市外の企業が連携し、レストランを運営する農業生産法人を設立するための準備を行っているところです。

5つ目に、空き家となった民家を都市との交流施設、宿泊施設に使えるように、旅館業法の適用を緩和しました。3階建ての伝統的な養蚕農家の建物を地域の方々の了解を得て、2戸ほど入手できる予定です。来年度、レストランや宿泊施設に改装する計画が進んでいます。



兵庫県養父市別宮、鉢伏山の中腹に広がる棚田。約130枚もの田んぼが広がり、奥には兵庫県の最高峰「氷ノ山」を望む



兵庫県内では養父市でのみ栽培されている特産の「ネクタリン」



兵庫県の「コウノトリ野生復帰グランドデザイン」に基づき、飼育・繁殖・放鳥の取り組みを行っている

■対談

◆養父市は「中山間地域の星」となるか

楠見 事業は迅速に進んでいますね。養父市の試みは全国の中山間地域の良いモデルになるのではないのでしょうか。

広瀬 今、日本は人口減少社会になっています。しかし、東京を中心とする大都市ではまだ人口が増え続けています。それは地方から大都市に人がたくさん流入しているという事です。つまり、地方では国の平均以上に急激な人口減少が進んでいるのです。しかも、大都市に出ていく多くは若者です。地方では人口再生産力のある世代がどんどん少なくなっています。そうすると子供が更に少なくなる、という悪循環に陥ってしまうわけです。

養父市は中山間地域で、しかも全域が過疎地域です。全国に1700余りの地方自治体がありますが、その約半数が中山間地域にあり、養父市と同じように人が次第に減って、10年後、20年後に町がどうなるのかわからないという状況にあります。その地域の市町村長は、どうしたら人口減少を食い止められるか、恐らく夜も眠れないぐらい悩んでいると思います。



広瀬 栄（ひろせ さかえ）
兵庫県養父市長。1947年兵庫県八鹿町（現養父市）生まれ。71年鳥取大学農学部卒。建設会社に勤務後、76年旧八鹿町役場に入り、商工労政課長、建設課長などを経て、2004年に旧養父部の4町が合併して発足した養父市で都市整備部長、助役、副市長を務める。08年養父市長選に出馬し初当選。現在2期目。

養父市が国家戦略特区となって地域の活性化にどう取り組むか。基盤産業である農業の活性化を図る事によって、住みやすい活力のある町を作り、人口減少に歯止めをかけられるか。地方によって町作りの方法は千差万別ですから、養父市の方法が他の地域でもそのまま役に立つとは思いませんが、養父市の取り組みが良い成果を出せたなら、「養父市でもそこまでできるなら、自分の所でも良い事ができる」ということで、どんどん続いてくると思います。今回の改革は必ず成功させなくては、と思っています。

楠見 日本のような少子高齢化を経験している国は他にありません。日本はこの問題の課題先進国と言えます。この課題を解決する方策を、養父市が先頭に立って示していく事で、日本どころか世界のモデルになると私は思います。我々にとっても、世界で初めての課題に挑戦しようとしている自治体と連携協定

今、地方に欠けている部分は、「知」です。知的なものがあれば、地方に住む若者も増えると思います。



を結んだ事には、非常にやりがいを感じています。

◆「学」の成果を「官」と連携し社会に

楠見 大学の使命は教育と研究と社会貢献です。大学は単に教育や研究だけをしていれば良いのではなく、それをいかに社会に還元するかが大事です。特に関西大学の場合は、学是として「学の実化」を掲げています。社会への貢献の方法はさまざまですが、その中には地域の課題を、教員、学生、そして地域住民の方々と共に解決に向けて協力して行動していくという事があります。そこで、本学は養父市をはじめ、いろいろな地域と連携協定を結び、その地域の課題に取り組んでいます。

広瀬 今回、関西大学と連携させていただくにあたって期待しているのは、養父市の課題を“学”の力で学術的、論理的に明確に指摘していただくことです。これができれば、我々にとっては、非常に力強い味方になると思います。地域の課題を洗い出していただき、それに対して我々は矯正施策を進める。このような“官”と“学”の連携が正しく求められる事だろうと思います。更に大学という外からの視点で、中にいる我々には、なかなか見えない養父市の魅力、価値あるものを客観的に指摘していただければ期待しています。

楠見 今回の連携協定を結ばせていただくにあたっては、「農」が重要なキーワードになっています。「農」は「食」につながります。大学で食の研究と言えば、農学部が思い浮かぶかもしれませんが、本学では理工系3学部で食を扱っている先生も多く、農学とは違った視点で新しい取り組みをしています。これも関西大学の大きな特徴だと思っています。今回の連携も環境都市工学部の山本秀樹教授の農産物の高付加価値化に関わる研究がきっかけでした。

広瀬 養父市はピーマンの生産が非常に盛んですが、もう少し高付加価値化できる農産物を生産できないかと模索しているところに、山本教授からハバネロを作って特産品化してはどうかというご提案をいただきました。また、山本教授は工学的な技術を使って米を高栄養価の機能食に加工し、普通に炊いたお米の状態では食べられない人でも食えるように流動食の状態を提供する、といった研究もされています。養父市で取れるおいしいお米を、時代に合った加工を施し提供できるなら、それは願ってもない事です。山本先生にご協力をお願いしたというのがきっかけでした。

楠見 ハバネロを利用したソースなどの商品も既に販売されました。研究成果が生かされ、付加価値の高い商品の開発やハバネロの栽培が休耕地になるところだった農地の利用につながっ

ているのなら、大変うれしいです。本学としては研究・教育のフィールドを養父市に提供していただいているわけですから、更にバックアップを行い、地域の方々と良い関係を築いていきたいと思っています。

◆学生が地域に飛び込み学ぶ事の効果

楠見 学生達にはできるだけ養父市にかかわってもらいたいと考えています。学生が地域住民の方々と交わり、一緒に考える機会を得ると、学生は自分の知識のなさを痛感します。その経験こそが、自分から問題を見つけ、調べて、勉強していくといった能動的な学びにつながるのです。そこに一方的な座学からは得られない、高い教育的な効果が期待できます。養父市の皆さんには学生を快く受け入れていただいて感謝しています。

広瀬 学生さん達に来てもらうことは大歓迎です。養父市は高齢者が多く、伝統的な秋祭りでも氏神様の幟を立てることすら一苦労するようになっています。学生さんが一緒になって幟を立てたり、巫女さんになっていただいたり、秋祭りはとてもにぎやかでした。学生の方々はちょうど孫の世代です。一緒に農作業をしてもらうのは、今の農業の担い手にとって、何よりも希望が湧く事です。

楠見 学生の発想は、我々とは少し違います。大人が気付かない視点で、養父市の魅力を見つけ出す可能性も高いと思います。今の時代は故郷を持たない学生も多いですが、かわり続ける事によって、養父市を故郷のように身近に感じる可能性も広がります。結婚して子供ができれば養父市を子供と一緒に訪ねる、そういう事もあるでしょう。実際に2007年に提携協定を結んだ丹波市では学生と地域のつながりが深まり、丹波に定住した者もいます。



▲養父市広谷で開かれる「広谷観音祭」。地元小学生が伝統の傘踊りで練り歩く

◀春を告げる養父の祭り「お走り祭り」。約1800年前より行われ、無形文化財に指定されている

Tops Interview

連携協定の中には、兵庫県立但馬農業高等学校の活動に大学としてサポートする事も含まれています。本学の高大連携センターは、「次代の人材育成」を目標に掲げ、高校生を対象としたプログラムをはじめ、幅広い年代を対象に大学の知を生かした連携プログラムを提供しています。将来的に、本学と但馬農業高等学校を結んで遠隔授業などもできるでしょう。高校でのインターンシップが実現すれば、学生が高校生と交流しながら、学ぶ事もできます。これは教員志望の学生には特にプラスになると感じています。

◆人口維持と農による経済活性化を目指す

楠見 最後に改めて、市長の抱負をお聞かせください。

広瀬 市の総合計画の中で、養父市の将来像を定め、テーマを「響きあう心 世界に拓く 結の郷 やぶ」としております。数値的な目標としては、人口はちょうど4年前の定住人口2万6000人とお勤めの方々、学生などを含めた市民規模(昼間人口)3万人を維持するとしております。人口の維持と地域経済の活性化は



楠見 晴重（くすみ はるしげ）
1953年大阪府生まれ。78年関西大学工学部土木工学科卒業。81年同大学大学院工学研究科博士課程後期課程中途退学。82年関西大学工学部助手。90～91年英国 Imperial College 留学。関西大学専任講師、助教授を経て、2002年教授。07年環境都市工学部教授となり、同年4月から学部長に。09年関西大学学長に就任。公益財団法人大学基準協会理事、一般社団法人日本私立大学連盟副会長、国土交通省道路防災ドクター、土木学会フェロー会員。主な共編著書に「地図環境情報学 地下を診る最先端技術」「アジア古都物語 京都一千年の水脈」など。

“官”だけでは絶対にできません。市民と協働で、“学”、“産”の力を借りながら実現していきたいと思っています。

楠見 関西大学としても、せっかく連携協定を結んだのですから、しっかりと継続的に取り組んでいきたいと思っています。今後ともよろしくお願いします。

広瀬 ありがとうございます。今、地方に欠けている部分は、“知”です。知的なものがあれば、地方に住む若者も増えると思います。農業も非常に知的でクリエイティブな産業です。農業は本当に楽しく、知的なものだということをしっかりと示す事が重要だと思っています。それには学の力が必要です。関西大学という“知”の塊の力を借りて、活力があり、なおかつ知的なものがある、そういう町に養父市をしていきたいと考えています。